

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「『プレザンス・アフリケーヌ』研究 新たな政治=文化学のために」
(平成 28 年度第 1 回研究会)

日時：2016 年 7 月 30 日（土）14:00–18:30

場所：AA 研マルチメディア会議室(304)

・吉田裕（AA 研共同研究員，東京理科大学）

「人種と文化をめぐる冷戦：第 1 回黒人作家芸術家会議とリチャード・ライト，ジョージ・ラミング，ジェームズ・ボールドウィン」

コメンテーター：小川了（AA 研共同研究員，東京外国語大学）

星埜守之（AA 研共同研究員，東京大学）

「Niam n'goura: 初期『プレザンス・アフリケーヌ』誌を読む」

コメンテーター：有田英也（成城大学）

・討論と打ち合わせ

概要

2016 年度第 1 回（通算第 4 回）研究会を上記の日時に開催した。以下、概要を報告する（敬称略）。

当初の予定では「打ち合わせ」を最後に考えていたが、これを最初に行うことにした。「打ち合わせ」では、今年度の研究会の予定開催数およびスケジュール、本プロジェクト最終年度におこなう予定である国際研究集会準備の進捗情報、それに連動する形で検討すべき外部資金獲得について、佐久間寛が報告をおこなった。時間の制約上、具体的に協議することは叶わなかったものの、共同研究員の大筋の合意は得られた。

その後、中村隆之の司会のもと、2つの報告がおこなわれた。最初は、吉田裕による報告「人種と文化をめぐる冷戦：第 1 回黒人作家芸術家会議とリチャード・ライト，ジョージ・ラミング，ジェームズ・ボールドウィン」である。以下、その要旨を引用する（吉田執筆）。

一九五六年、パリにて開催された第一回黒人作家芸術家会議は、バンドン会議以後、カリブ、アフリカ、合衆国から、肌の色という共通性を介して、作家、詩人などの知識人が集まった、初めての世界的な大会だった。バンドン同様、人種主義と植民地主義への再検討が中心的な議題であり、『プレザンス・アフリケーヌ』誌をはじめとして、開催の中心を担ったフランス語圏の知識人はこれらへの考察に取り組んだ（ファノン「人種主義と文化」、セゼール「文化と植民地主義」など）。

ただし、英語圏からの参加者にとっては、人種主義のあり方への考察、そして、植民地主

義へのアプローチは、相違があった。特に、大会組織委員会の一人でもあった合衆国の作家リチャード・ライト、参加記を後に出版したジェームズ・ボールドウィンの立場は、合衆国当局による冷戦期の文化政策と無関係ではなかった。本発表ではまず、英語圏とフランス語圏の参加者たちの差異に着目する。

後半では、英語圏カリブ海からの唯一の参加者であるジョージ・ラミングの発表「黒人作家とその世界」に焦点を当てる。ライトやボールドウィンに作家としての親和性を覚えつつも、同時に実存主義的な思考様式に慣れ親しんでいたラミングは、この二人とは別様に人種主義への考察を行っていたことを論じたい。また、『プレザンス・アフリケーヌ』誌に出版された発表原稿と、後に別箇所で開催された同名の論考は内容に異動があり、このことも検討課題とする。

以上の論旨の報告を受けて、コメンテーターの小川了は、同会議の計27本の論文を読み込んだ上で、リチャード・ライトの報告「伝統と産業化」を読む補助線として、ポール・アズメの「司祭の反乱」およびアブドゥライ・ウッドの「アフリカは実定法の策定を考えるべきか」の内容を紹介した。小川は、アズメおよびウッドという西アフリカの知識人に連なる、非西欧的なものとしてのアフリカの伝統の擁護という観点があることを、アマドゥ・ハンパテ・バの『アフリカ文明のさまざまな側面』というインタビュー形式の著作を参照しながら明確化した。その上で、近代化＝西欧化の局面を否定するのではなく、それを受け入れて独自の道を歩むべきだとするライトの提言を肯定的に捉えた。

議論では吉田報告が示した、合衆国の反共政策と無関係ではないと考えられるライトの立ち位置と発言をどう捉えるのかをめぐって、またフランスの文壇でのライトの受容などが話題となった。また、ラミングの報告が示した「恥」をめぐる考察についても議論が交わされた。

続くセッションでは、星柊守之が「Niam n'goura: 初期『プレザンス・アフリケーヌ』誌を読む」という表題のもと報告をおこなった。以下、その要旨を記す（中村執筆）。

『プレザンス・アフリケーヌ』は1947年に、計7号まで刊行されたのち、特集号に切り替わり、その後、1955年に再スタートする。星柊報告が扱ったのは、創刊号から7号までの第1期である。第7号までの目次をリスト化した配布資料、また創刊号掲載の編集委員会・後援委員会に名を連ねる書き手などを逐一確認しながら、第1期が必ずしもアフリカニストによる記事で占められていないことや、フランスの文壇との協調関係の中で雑誌が刊行された点が明らかになった。

その上で、星柊報告は、創刊号のアリウヌ・ジョップの「Niam n'goura、あるいは、『プレザンス・アフリケーヌ』の存在理由」およびジャン＝ポール・サルトルの「黒い現前」を訳文（星柊訳）に基づいて紹介しながら、一見すると対照的な筆致の論考を提示するものは何かと聴衆に投げかけた。

これを受けて、コメンテーターの有田英也がジョップならびにサルトルの論考について星椋報告を補強する読みの視点を付け加えつつ、創刊号の後援委員会の筆頭に名を連ねるアンドレ・ジッドの視点に見られるパターナリズム（家父的立場からの温情的視点）を指摘した上で、ヴォドゥを題材にしたポール・モランの『黒魔術 (Magie noire)』（1928年）という、現在のプレイヤード叢書に未収録の短編集の概要を紹介した。

以上を受けて、とりわけアリウヌ・ジョップの論文に見られるフランス礼賛の意味について、ジッドとジョップの関係、創刊当時のジョップの経済的貧窮といった人的・社会的文脈から捉える、当時の時代状況を知るのに有益な意見が提出された。

研究会は、活発な意見のやりとりのなかで、19時頃に終了した。なお今回は共同研究員をふくめ、20人の研究者が参加した。

(文責：中村)